



Reimagining the Filipino Nation : Insights from the Filipino Diaspora Experience in East Asia

著者	SAN JOSE Benjamin Arcena
その他のタイトル	フィリピン国民の再想像 : 東アジアにおけるフィリピン人移民の経験からの考察
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6668号
URL	http://hdl.handle.net/2241/120185

氏 名（本 籍）	Benjamin Arcena SAN JOSE（フィリピン）				
学 位 の 種 類	博士（国際公共政策）				
学 位 記 番 号	博 甲 第 6668 号				
学位授与年月日	平成 25 年 7 月 25 日				
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当				
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科				
学 位 論 文 題 目	Reimagining the Filipino Nation: Insights from the Filipino Diaspora Experience in East Asia（フィリピン国民の再想像－東アジアにおけるフィリピン人移民の経験からの考察）				
主	査	筑波大学	教授	博士（法学）	首藤 もと子
副	査	筑波大学	教授	Dr phil.habil.（歴史学）	クラインシュミット ハラルド
副	査	筑波大学	准教授	Ph. D.（国際関係）	キンポ ネイサン ギルバート
副	査	筑波大学	准教授	博士（国際政治経済学）	明石 純一

論 文 の 要 旨

本論文は、フィリピン人のディアスポラ・ナショナリズムの概念と行動様式に関する独自の分析枠組みを提示し、それに基づいて香港と日本におけるフィリピン人社会のナショナリズムに関する認識と活動について分析した論文である。本論文は、フィリピンのディアスポラ・ナショナリズムについて、次の 3 つの観点から考察している。それらは、第一に、フィリピン「国民」は、国家、市民社会およびディアスポラの共同体という異なるアクターによって、どのように想像されてきたか、第二に、ディアスポラ自身は国外から、フィリピンの国家や国民アイデンティティをどのように認識しているのか、第三に、ディアスポラとしての経験は、フィリピンのナショナリズムおよび国家や国民としてのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしているかという観点である。これらの観点から、筆者は、これまでのナショナリズムの理論的研究に対する批判的仮説を提示したうえで、香港と日本を対象にフィリピン人のディアスポラ・ナショナリズムの形態を実証的に分析している。

フィリピンは、同国の人口の約 1 割近くが国外に労働移住しており、世界的に有数の国外労働移動の多い国である。政府も国外労働を積極的に奨励しており、国外移住者による同国への送金も同国への政府開発援助(ODA)や海外直接投資（FDI）を上回っている。本論文は、このように越境移動が経済的に大きな比重を占めるフィリピンにとって、香港におけるフィリピン人労働者や日本におけるフィリピン人ディアスポラの間で、政府が主導するナショナリズムとは様相の異なる「国民」のアイデンティティやナショナリズムが展開していること、そうした国外でのディアスポラ・ナショナリズムが、フィリピン国内の出身地の社会団体との間でさまざまに異なるトランスナショナルな関係を構築していることを実証している。そこで、こうした過程は、グローバル化のなかで、フィリピン人の「国民」像が、今も再想像されている過程であると筆者は論じている。

本論文は、序章と終章を含め全 7 章から構成されている。

第 1 章は、序章であり、本論文の研究目的と上記の問題設定について述べている。次に、ディアスポラ・ナショナリズムの理論的枠組みとして、筆者は、政府が主導する公式ナショナリズム(Official Nationalism)、政府に批判的な市民社会が展開する代替的ナショナリズム（Alternative Nationalism）、そのいずれとも異

なる日常的ナショナリズム(Demotic Nationalism) に類型化して、それぞれの特徴を論じている。また、アンダーソン (Benedict Anderson) の「想像の共同体」としてのナショナリズムで提起された、想像性、限定性、主権性、共同体という4つの基本概念について、フィリピンのディアスポラ・ナショナリズムの文脈で、いずれも批判的な修正仮説を提示している。

第2章は、本論文に関連する先行研究について批判的に検討している。先行研究については、ナショナリズムの理論研究、ナショナリズムと移住労働者の関係性に焦点をおいた研究、および国民アイデンティティと移住労働の関連性を対象にした研究に大別して、先行研究の主な議論を分析的に整理している。そして、ナショナリズムと国外移住者とアイデンティティという3つの要素を包括的にとらえる視点が、これまでの研究では欠けていたことを指摘している。そこで、本章では、フィリピンの「国民」意識はナショナリズムの動態が、政府と市民社会に加えて、国外移住者の体験も加えた競合的な関係性のなかで、再形成され続けているという仮説を提示している。

第3章は、フィリピンのディアスポラ・ナショナリズムの分析枠組みとして、公式ナショナリズムと代替的ナショナリズム、および日常的ナショナリズムという3つの理念型を提示して、それぞれの特徴、1980年代から2000年代までの時代的な推移をまとめている。また、フィリンにおける移住労働に関する言説の展開について、公式ナショナリズムが”Bagong Bayani” から”Global Filipino”まで、さまざまな言説で海外労働を奨励したことが、フィリン「国民」再想像の過程の一面であったことを論じている。

第4章から第6章は、上記の3つのディアスポラ・ナショナリズムが、それぞれ香港、日本およびフィリンにおいてどのように表出しているかに関する現地調査に基づく事例研究である。

第4章では、香港におけるフィリン人のディアスポラ・ナショナリズムについて、上記の公式ナショナリズムと代替的ナショナリズムおよび日常的ナショナリズムが競合的に展開している状況を実証的に論じている。筆者は、香港における調査に基づいて、香港での主なフィリン人団体のうち38団体のナショナリズムの特性を分類して、それらがもつばら代替的ナショナリズムまたは日常的ナショナリズムの特徴を備えていると論じている。そのなかでも、フィリン人移住者たちが共有する「フィリン人」の目的のために、自ら交渉し活動している点で、日常的ナショナリズムが優勢な特徴であると論じている。

第5章では、1980年代以降現在に至るまでの日本におけるフィリン人移民社会を対象に、その主な動向とこれまでの言説の変換を論じている。筆者は1980年代以降現在まで、日本の社会経済的な変容とともに、日本におけるフィリン人移民社会について、その言説が当初の「じゃばゆきさん」から、「在日フィリン人」、さらには「介護士」へと拡張してきた経緯を示し、それぞれの言説について、公式ナショナリズム、代替的ナショナリズム、日常的ナショナリズムの観点からどのように語られてきたかを分析している。

次に、東京と茨城県におけるフィリン人団体計8団体の指導者にインタビューを行い、政府が提唱してきた「移民と開発」に関する概念に対する認識や、フィリン人としてのつながりの要素等を分析している。その結果、彼らがフィリン人であることを認識する最大の要因は、政府が提唱する「移民と開発」の文脈のなかの「国家」や、代替的ナショナリズムが強調する「国民」の概念でもなく、むしろディアスポラ自身が日常的な経験を通して共有する「フィリン人であること (Filipinoness)」であると指摘している。そこで、香港でも、日本においても、フィリン人のディアスポラ・ナショナリズムの主流は、日常的ナショナリズムであると論じている。

第6章は、「移民と開発」の連携について、国家、市民社会、国外の移民社会が、これまでにそれぞれどのような制度をフィリン国内で構築してきたかを論じている。そのなかで、本論文は、これまでの研究で取り上げられてこなかった視点として、国外移民社会を形成するフィリン人ディアスポラが自ら率先してフィリンの開発のための制度を構築していると指摘している。さらに、そうしたディアスポラは、彼らの移

民体験が家族や故郷に及ぼす影響について、国家的視点のような巨視的な視点でも、抽象的な言説でもなく、あくまでも実際の考え方(pragmatic views)をもって行動していると論じている。

第7章は終章である。本論文の総括として、筆者は、香港や日本におけるフィリピン人のディアスポラ体験のなかで、公式ナショナリズムと代替的ナショナリズム、および日常的ナショナリズムという競合するディアスポラ・ナショナリズムの動態があること、そのなかから、フィリピン人であることについての新たなアイデンティティが形成されていることを強調している。換言すれば、ディアスポラ体験を通して、在外フィリピン人社会だけでなく、故郷の共同体社会もまた、フィリピン人国民の範囲とその性質について再形成されていることを論じている。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、ディアスポラ・ナショナリズムの分析枠組みとして、公的ナショナリズム、代替的ナショナリズム、日常的ナショナリズムという3類型を用いて、政府、市民社会およびディアスポラ社会の言説、認識と行動を分析している。その結論として、本論文は、政府や市民社会レベルが、それぞれにフィリピン人ディアスポラを包括する新たな言説を提唱し、新たな政策や活動の組織化を進めている一方で、フィリピン人ディアスポラの社会では、彼ら自身の視点から別の日常的ナショナリズムが実践されていることを論じている。また、香港や日本という移住先から出身地社会をつなぐネットワークがさまざまに構築されており、フィリピン人ディアスポラの体験が移住先だけでなく、フィリピン国内においても、フィリピン「国民」の再想像を促していると論じている。

本論文は、第1にディアスポラ・ナショナリズムの研究に関する3つのナショナリズムの理念型を用いた新しい分析枠組を提示し、それを香港と日本におけるフィリピン人ディアスポラを対象として実証的に適用することに成功している。第2に、フィリピン人ディアスポラの間で優勢なのは、実は政府が主導する公式ナショナリズムではなく、日常的ナショナリズムであると論じている点で、新しい視点を提供している。フィリピン人ディアスポラに関しては、これまでに多くの研究があるが、本論文のような分析枠組みと議論の展開は、これまでの研究にはみられないものである。

ただ、「日常的ナショナリズム」の概念定義には、さらに精緻に考察する余地が残されている。また、日本での実証研究の対象が、属性や職種等において限定的であることは否定できない。しかし、この2つの点は、本論文全体としての論理構成の価値を損なうものではなく、本論文には、理論構成と実証的検証の内容において、フィリピン人ディアスポラ・ナショナリズムに関する独自の学術的貢献が十分に認められる。

2 最終試験

平成25年5月10日、人文社会科学学位論文審査委員会審査員全員の出席のもとに最終試験を行い、論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った結果、審査委員全員一致で合格と判定した。

3 結論

上記の論文審査及び最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際公共政策）の学位を受けるに十分な資格を有しているものと認める。